慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	故石坂巌先生を偲ぶ
Sub Title	
Author	鈴木, 秀一(Suzuki, Shuichi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2007
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.12 (2007.) ,p.134- 135
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20070000-0134

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

故石坂巌先生を偲ぶ

鈴木　秀一

慶應義塾大学名誉教授石坂巌先生は2006年12月28日、肺炎のため逝去されました。享年85歳でした。お別れ会と偲ぶ会は2007年2月25日、新宿区の日本出版クラブ会館で行われ、先生の薫陶を受けた人たちが多数集まり、先生のご功績とお人柄を偲びました。

先生は1921年3月28日群馬県高崎市にお生まれになり、大阪外国語学校ドイツ語部で「毎年ドイツ語の辞書を買い換えた」（先生談）ほどドイツ語に熱中され、その後、慶應義塾大学経済学部を卒業後、三菱鉱業非鉄金属工業所に入社されました。そして、1948年に慶應義塾大学通信教育部インストラクターとして三田に戻られました。その後1958年に商学部専任講師となられてから1986年に商学部を定年退職されるまで、先生は研究・教育のみならず商学部長（1977年～1979年）および福澤研究センター所長（1983年～1986年）として多方面にわたりご功績をあげられました。大学院教育では、商学研究科と社会学研究科を兼任されて、ウェーバー研究および経営社会学研究を通じて三田の社会学にも多大な影響を残されました。先生の大学院の授業に出席した人は、ウェーバーの原書『経済と社会』が電話帳よりもボロボロになるまで読みこなされているのに驚いたものでした。また、例えば『社会学の根本概念』を読む際、その1つの概念を日本企業の組織労務問題に適用されて鋭い応用問題を出されるので、受講生は理論と現実の間を往復しなければならないことを否応なしに訓練されたのも先生の大学院教育の特徴でした。それは価値理念なしの現実は存在しないというウェーバー的な方法論の教育実践だったと思われます。慶應義塾大学退職後は常磐大学で研究・教育・アドミニストレーションの面で余人をもって代えがたいご功績を残されました。

先生の輝かしい業績の中ではあまり知られていない論文ですが、先生は経済学部の学部時代に「近代社会の論理と心理」を文芸評論誌『白樺』（第5巻2号、1943年）に発表されました。筆者が大学院生時代に、先生のご自宅に伺った際にいただいたコピーを改めて拝読しますと、この論文はウェーバーと大塚久雄が主でマルクスとデカルトが副の構成になっていて、近代社会の明暗のうち「暗」に焦点を当てているように読めます。近代における「目的と手段の転倒」という問題性を浮き彫りにしたこの論文で、22歳の先生がつかみとられたスタンスが、その後の先生のご研究においてさらに展開されました。それが「マックス・ウェーバーにおける社会学的精神態度の形成」（『三田商学研究』創刊号、1958年）であり、やがて『経営社会政策論の成立』（有斐閣、1968年）として集大成されることになる思想でした。先生はつねにこの思想的根拠からみじんもぶれることなく、経営や哲学や方法論について語られたと思います。

先生の思想には「人間の自由と自律」と「自律した人間が協力する」という二つの中心がありました。『知の定点』（木鐸社、1984年）では、先生は前者を「人格の尊厳」と呼んでおり、後者を「アソシエーション」と表現しています。先生の知的格闘の相手は、近代社会の中で人間の「人格の尊厳」を脅かすものすべてだったと言えます。例えば冷徹な「鋼鉄の容器」と化した企業の大規模組

織のメカニズムや労務管理手法に対して、先生は容赦なく戦いを挑まれました。ゼミの現場でも、筆者が大学に職を得てからも続けられた社会人勉強会「石坂教室」では、先生は弟子たちの研究発表の中にチラリとでも「人格の尊厳」の敵を発見すると迫力ある声で批判されたものでした。私も「それは強者の論理だ」という先生の声が昨日のことのようによみがえります。先生は、弱者の立場から近代社会というもの、そのメカニズムに対して知的格闘を続けておられました。先生は、経営者のためのツールとなりかねない経営理論を独自の「経営社会学」を通じて経営者と従業員全員を含めた、文字通り「経営社会」のための理論として構築しようとなさいました。『経営社会学の系譜』(木鐸社、1975 年) にもみられるように、その理論的基礎がマックス・ウェーバーであったことは言うまでもありません。

また後に先生は、福澤諭吉の思想に共鳴されましたが、それは商学部での最終講義「朝鮮と福澤諭吉」(『文明のエトス』に所収) や『文明のエトス』(河出書房新社、1995 年) をみてもわかるように、22 歳のころ先生がつかみとったまさに「知の定点」としてのスタンスを維持発展されたからこその福澤論となっています。

「福澤の哲学であり、宗教でもあったのは『文明』の思想であった。彼はこれを内的文明と外的文明に分けて考えた。前者は個々人の自主、自立そして礼と秩序の社会であり、後者は郵便・電信制度、蒸気機関、鉄道など物的生活面の進歩発展である。この両者をまとめて彼は、物的生活の快適さの実現と、しかしその物質欲に引き回されない精神的品位の向上を文明の理想的生活像とした」(『文明のエトス』、p.89)。

この引用文から、先生の晩年の知的スタンスが一直線に 22 歳の若き日から伸びていることを感じます。青春時代の先生は「優秀で性格もよかった友人たちが白い箱に入って帰ってくるのをどうしようもない思いで迎えた」(先生談) 日々だったそうです。個人の自由と人格の尊厳を、これからも問い続けることこそ先生の学恩に少しでも報いる方法ではあるまいか。先生の薫陶を受ける幸運に恵まれ、四半世紀の間、公私にわたり先生の学恩を受けてきた弟子として、私は今、先生の経営社会学の出発点を振り返りつつそのように感ずる次第です。

先生の海よりも深い学恩に感謝しつつ、先生のご冥福をお祈りいたします。

(すずきしゅういち　立教大学経営学部)